

灰塵戦線異常無し

あげびたし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界は『災獣』により蹂躪され荒廃した。

辛うじて生き残った人間達に残された希望はCityとDOLLS。

度重なる『災獣』の脅威を重く見た企業連は新たな前線指揮官を任命した。

これは、その記録である。

目次

破損記録ファイル	1
作戦記録ファイル2/2	4
作戦記録ファイル2/2	10
廃棄処分予定ファイル	17

破損記録ファイル

「作戦概要は以上です。それでは。」

目の前の彼女はそう言いはなつた。顔面に装着されたバイザーで素顔は見えないが見えたとしても、彼女の意図を読み解くことはできないだろう。

淡々と伝えられた作戦概要は極々簡単なモノ。Cityから資材補給の為に発着している装甲列車の護衛任務。ただ、それだけである。こここのところの『災獣』の動向を考えれば落ち着いている今が最適な時期なのはわかる。

しかしそれでも、私は言わなければならない。

「任務は了解いたしました。直ちに作戦行動を開始いたします。大型共生種型『災獣』が現れた場合。戦力差を考え撤退と作戦中断の決定権は頂けるのでしょうか。」

装甲列車の行き先である砂漠路線。その目的地周辺で辛うじて確認された大型共生種の痕跡。これを無視していられるほど我々は楽観視を決め込むつもりは無い。

いくら自分達DOLLSが量産可能で代えが効く兵器だとしても、損害が甚大ならば今後の作戦に大きな影響がでる。いくらただの補給任務の護衛だとしても最悪には備えなければならない。

無限にも思える災獣を相手に有限である我々は勝利しなければならないのだから。

『勝利』とは、なにもって勝利なのだろうか。

〈人間を延命させる事が勝利なのだ「警告―思考違反―」〉

―またやってしまった。

人格拡張によりインテリフレームを埋め込まれた私は、ある程度の思考を巡らせる事ができる。

しかしそれでもある事を考えようとすれば、思考に歯止めがかかってしまう。

自由意思と思考をある程度は認められているとはいえ、これでは首輪をつけられたようなものだ。

「思考できる」という事が、こんなにも苦しく辛いものとは。

こんなモノを生まれながら持っているニンゲン達が狂わずにいる、ということが今でも信じられない。

いや最初から持っているからこそ、狂わないのかもしれない。

所詮私達は兵器だ。それ以下でも、それ以上でもないのだから。

ならば、この目の前の彼女は？バイザーで顔を隠してはいるが、その体躯はニンゲンでいうところの少女と分類されるものなのではないか？私の知識に間違いがなければ、こんな場所にいられるような存在ではないはず。

だが、その口から出る言葉に感じるモノは手馴れたかのようなソレ。

「その決定権を与える権限は私にはありません。」

「それでは遅滞戦闘を行いながら、装甲列車を守れ、と。」

任務だ、仕方がない。怒りをたたえた瞳で睨んだとしても、表情が読めない彼女には意味が無い。

彼女はあくまで〈代理人〉。作戦を伝えCPとして、我々のオペレーターをするだけの存在。確かに、彼女に理不尽な怒りを向けるわけにはいかない。だがそれでも言わなければ収まりがつかなかったのだ。私が怒りを向けたのは、おそらくこの会話を聞いているであろうクソツタレに向けて、だ。

私の意図を知ってか知らずか、作戦室に備えられたモニターから軽薄なダミ声が響く。

【キャロりくん？聞こえる？】

ー我々の本当の指揮官は、全くもってクソ野郎だ。

作戦記録ファイル2 / 2

作戦記録 Part 1

遠雷の如く響く砲声…いやアレは咆哮か。ここは全てが砂に還った不毛の大地。時間の流れが加速したかのように風化していく。DOLLSである私も例外では、無い。砂塵が少しづつ私の装甲を削っていく。だが、そんな全身に纏わり付く不快感を気にしていられるような状態ではない。

目の前のコレは、そんなことを気にしていい相手ではない。

咆哮と共に吐き出された砲弾は岩石なのか鉱石なのかはわからないが、とてつもない破壊力を秘めているのは自明だ。部隊の至近弾を認めた私は咄嗟に確認を取る。

「Ⅵ号戦車ティーガーより全隊へ！損害報告!!」

「Ⅱ号戦車隊、被弾無しですわ！機動戦に支障無し!!」

「さ、Ⅲ号戦車隊、被弾無しですう！でも、マウスさんが!!」

「わらわの事は気にするで無いわ!!Ⅷ号戦車マウス、被弾すれど支障無し!!擦り傷じゃこんなモン!!」

至近距離に着弾した余波で巻き上がった破片が装甲に突き刺さっているのが、この距

離からでも分かる。

そんな状態で強がっているのは、部隊の盾であるⅧ号戦車マウス。

私よりも稼働時間が長いベテランであり、その分厚い装甲で重型災獣の猛攻すら軽々と凌ぎ笑いながら蹂躪する。

―その彼女が、らしくもなく焦っている。それだけで、事の重大さがわかってしまう。

「こちらスツーカー。これより対地攻撃を開始するわ。」

「地上のみんな頑張れー！H s 1 2 9、以下同文!!」

空中よりややノイズが入る通信。いまだ辛うじて維持ができています。そうだ、辛うじてなのだ。

ヤツが巻き起こした砂嵐が原因だろう、ジャミングの代わりというわけか。つくづく規格外だということを理解させられる。

機銃の雨が降り注ぐ。が、まるでにわか雨にでも降られたかのように顔をわずかに歪めるだけ。まだ届かない。

だがそれでも、我々は与えられた任務を忠実にこなすのみ。

我々は兵器なのだ。ニンゲン達を延命させるだけの、兵器だ。

思考が邪魔だ、これなら僚機として共にいる『私』の方がマシだろう。

チラリと背後をみれば、顔面に代理人と同じバイザーをつけた自分と瓜二つの存在。

量産された、『私』。

砂塵を盛大に巻き上げながら履帯を回し、強襲形態を維持したまま狙いを絞る。視界に投影された射撃補正リングが赤く光り、88mm砲が火を吹く。

着弾は確実なはず、だが手応えが無さすぎる。

それもそのはずだ。本体であろう女性型災獣の身体を守るように見上げるほどの巨体を持つ竜型の災獣が、とぐろを巻いているのだ。それに阻まれていて有効打を入れる事ができない。

護衛対象の装甲列車は回収物資の積み込みを終了した。

後は、掘り起こしてしまったアレを無事に持ち帰るだけ。

ーそうだ、全てはアレのせいだ。アレを掘り出した瞬間に、ヤツが現れたのだ。

何が、何が簡単な仕事、だ。あのクソ野郎。

私は、数時間前の作戦室を思い出していた。

※※※※

【キャロリくん？聞こえる？】

「主任。今どちらに？」

【路線進路上の災獣が逃げちゃってき、そいつ等向かわせて、今すぐ。】

「大型共生種が出現した場合、彼女達だけでは荷が重いかと。」

【あ、そうなんだ。で？それが何か問題？】

「了解しました。お聞きの通りです。作戦の変更はありません。」

主任と呼ばれる我らがクソツタレ指揮官殿。

私の88mm砲で打ち抜いてやりたい。そう願わずにはいられない。

実際、目の前の彼女はよくやっていると思う。

キャロリンと呼ばれた（代理人）キャロル・ドーリーはその気持ち悪い愛称呼びには全く反応を示さずに淡々と業務をこなす姿は、ニンゲンというよりも我々寄りに感じるほどだ。

「簡単な仕事なんだから早くしろ」と言う言葉を最後に音声のみの通信は切られ、私は不満を抱えたまま出撃部隊の隊長機として装甲列車の護衛任務についた。

渡された報告書によれば、今回の目的地は砂漠地帯でもかなり奥まった場所。

2カ月以上前の戦闘により地表が深く抉られ、その時に顔を現した前時代の遺跡の調査。

遺跡。といっても砂に飲み込まれたどこかの国の、何かの施設であろうというのがニンゲンの研究者達の見解だった。

白い防護服を纏った作業員達が物資を回収していく、予想されていた装甲列車に襲いかかってきた小型の災獣共は、さしたる脅威にもならなかった。

それらの破壊した災獣達の残骸の回収をしていると、作業員達がにわかに騒ぎ出す。どうやら、報告書にあった遺跡から何かが出土したらしい。

大型クレーンで持ち上げられたのは鉄の塊。

いや、腕と脚がついて見えることから、どうやらそれが人型らしいというのは分かる。推定10m前後の人型の：ロボットかしら？与えられた知識のどれとも該当しないシルエツト。

火災にでもあつたかのような黒い煤がこびりつき、この異常な砂漠の中で風化したであろう赤錆に塗れた姿は趣味の悪い棺桶のよう。左腕は大きく破損してはいるが、肩に見える装甲板に刻まれたエンブレムが陽に晒されてキラリと輝く。

大きく羽を広げたソレは真っ黒に焼き焦がされたかのような鳥。アレは確か、カラスと呼ばれる鳥類だったか。いまでは絶滅した生物をこんな形で目にするとは思わなかった。

破損してはいるが、辛うじて5体満足なことが奇跡だ。大収穫ともいえる。

だが、こんなモノを掘り起こしてなんの意味があるのだろうか。

修理して使うのだろうか？

災獣には前時代の遺物など意味をなさないというのに。

それを貨物車に運び込んだ瞬間、地響きとともに近くの砂丘の下が崩れる。

空中を哨戒していたスツーカーより緊急警報が入り、全部隊が戦闘態勢に入る。

吹き出した間欠泉のように砂が舞い、猛烈な砂嵐が吹き荒れはじめた。

砂嵐の奥。影になって見え辛いが、アレを見間違うわけが無い。

砂漠に潜むと言われる大型共生種。破壊しかもたらさないモノ。

それが目の前に、現れた。

作戦記録ファイル2 / 2

作戦記録 Part 2

※※※

遅滞戦闘を言い渡されてはいるが、このままではジリ貧だ。

ならばこそ、と意を決して突貫。機動力を生かした電撃戦を試みる。

今の今まで距離を取った撤退戦。

ゆっくりだが確実に我々を追い詰める共生種は、単身で戦線をこじ開けつつあった。

反対に言えば、我々に入り込みすぎなのだ。

釣れた魚を料理する、普段ならば簡単だが相手は共生種の中でも異形中の異形。

回転ドアの要領で、広げた戦線を閉じるように挟撃する。

引き込みの支点であった私も急旋回し反撃を開始する。

左翼のII号戦車隊9体が隊長機を先頭に三角錐型の突撃軌道を取りながら火力を集
中させ、対災害獣機関砲が束になって竜種の胴体を軽快な音でノックし続ける。

効いていないのは明らかだが、それでもそちらに気が逸れた。

つまり進撃が止まったのだ、竜種型がⅡ号戦車隊に砲身そのものの顔面を向けたその瞬間。

全く逆の方向からⅢ号戦車隊6体とマウス隊3体が射撃を開始する。

竜種はその半身に先程よりも巨大な衝撃をまともに受けその身を大きくぐらつかせる。

流石に脅威を感じたのか、黒いドレスを纏う女性型の周りにとぐろを巻き始めていた。

守らねばならない、ということにはアレがあの大形共生種の核なのだろう。

完全にその脚を止めた隙を狙い、挟撃状態を維持させたまま私は突貫する。

強襲形態の突破力を生かした白兵戦を仕掛ける。

大形共生種の核であろう女性型炎獣の顔はそれを隠すベール越しにもわかるほど醜く歪み、とぐろを巻いていた竜種型に迎撃させる。

蛇のような胴体で上段からの叩きつけ、それをトップスピードを維持したまま右履帯を格納し、急制動をかけた無茶なドリフトで迎撃してきた攻撃を躲し、左に回り込む。

僚機である『私』は同じ動きを寸分無くトレースし、ぴったりと付いてきている。

砲身を格納し、黄色に光る対炎獣干涉熱刃を起動。

迎撃のために伸ばした竜種の胴体が見せた隙を狙う。

勢いにまかせたまま二振りの熱刃で刺突するのはガウ空きの女性型。

驚きに目を見開いているあたり意外と感情は豊かな方なのかもしれない。

と油断無いことを考えてしまふ。狙う先は、その綺麗はお顔。

だが彼女の周りに貼られた透明な絶縁壁が一瞬の刃先を受け止め、僅かにズレた刺突は右肩を貫く。

ニンゲンのように真つ赤な血が巻き上がる事は無く、岩石を砕くかのようにひび割れ腕が崩れ落ちた。

「……」

口が裂け、ぞろりと牙をむく女性型。憤怒に駆られた顔は蛇のソレ。

そして目の前には鎌首をもたげた竜種の顔面に光が収縮していく。

私の攻撃は、致命傷にはならなかった。

というより、この攻撃で仕留められなかった時点で既に詰んでいたのだ。

「……Scheie (畜生)」

その光を睨みながら吐き捨てる。

ここで終わるならば、せめてあの男に一発ぶち込んでおけばよかった。

※※※※

「……それで? 何しにきたのよ。アンタ達は。」

「ここに、あの方が来ると聞かされたのです。ならばこそ、私が必要なのでは、と。」
暗い格納庫に佇む黒い影。

黒い外套に身を包んだ彼女。

本当ならば、見慣れた彼女。

しかし今その目元は、金属質のバイザーに隠されている。

「そう…なら勝手にすればいい。」

「ありがとうございます。」

人形のようにニコリと口元を動かす彼女をみて、自分の目つきが自然にキツくなるのがわかる。

「アンタ達が、何をするつもりか知らないけどさ、邪魔をするんじゃないよ。…灰塵教会。」

「ええ。私はここに来るあの方…【灰の方】を守る火守女としてただ待つだけでございませうから。」

教会の変態ジジイ共が、彼女に何をしたのかはわからない。

だが私知っていた彼女は、容姿や性格はそのままでも全く異質なナニカに変わっていた。

嘆息しながら踵を返す。

「火守女…ね。もうあの頃には戻れないのね…フラン。」

背中に彼女の視線を感じながらそう呟いて、私は研究室へ脚をむけた。

『大変だねえ技術士官サマはさあ?』

「盗み聞きとは、関心しないな。主任。」

『アツハハ!!ま、どうでもいいんだけどね!!』

入室した途端に聞こえる耳障りの悪い声が手首に巻いた通信機から聞こえる。

本当に嫌らしい奴だ。

『通信状態のまま話すそつちの落ち度なんじゃあない?それで?使い物になるの?ソイツ。』

私はその声に嫌悪感を隠さずに吐き捨てながら、研究室の窓から見える格納庫み収容されたモノを見る。

遺跡から発掘されたモノ。前時代の遺物。時代遅れの骨董品。

そして、そのガラクタの前に立ち手を伸ばす、黒い外套を羽織ったカラスのような彼女。

「私を知るわけ、無いじゃない。黙ってアンタは自分の仕事をこなせばいいのよ、主任。」
『ハイハイわかりましたよーつと、キャロリンといい君といい。言うことがキツイねー全く。それじゃーねロザリくん。』

嫌な敬称で私を呼ぶ声はブツリと切れる。

Cityに迫っていた災獣の大群の守備任務をあ副主任は単機で完全にやり切っていた。

あとは雑魚の掃討だけだという。ならばもう、勝手にやらせればいい。

格納庫の中では火傷に爛れたような腕を伸ばし、ガラクタの胸に掌を当てた彼女が俯きながら何か祈っていた。

その姿は、まるで崩れ落ちる戦士に加護を施す神官のようであり、倒れかかる人間を誘う悪魔のようであり、

主人の帰りを待っていた従者のようであった。

するとその掌が触っていた装甲が薄らと赤く燃え始め、チラリチラリと火の粉が舞い始める。

それは、灰に残っていた燃えさしがまた微かに燃え始めたかのようなだった。

…なんであれ、彼女はすでに私の理解を超えたモノになってしまったのだ。それを睨みながら私は独り呟く。

今の私はグレーテル・フライヘア・シユテルマー・フォン・ライヘンバッツハ。

ロザリイと呼ばれた女は、もういない。

…そこでふと笑えてきた。

私も、もうあの頃には戻れないということに。

廃棄処分予定ファイル

機密記録（一部破損）

※※※※

消えゆく鼓動のように、パチリパチリと燻る火が視える。

私にはもう、見えるモノなんてあるはずがないのに。

罪火によって世界は焼かれた。

灰に還る定めの中でまた、私は貴方に出会った。

全てを焦がす、真つ黒に燃やす。

しかしその火は、人ならざるモノでは、起こし得ない。

人は自らの火で、焼かれるべきである。

灰の方、どうか、火を継いで下さい。私の祈りを、どうか。

※※※※

それは、燃えカスであった。

今まさに灰になるはずの燃え尽きる前の木炭のようであった。

全身を炎で舐められたように黒ずんだ体軀。

欠損した左肩の接合部。

頭部装甲から覗くスリットの奥で光る赤。

その全てが静かに燃えているように拡大と縮小を繰り返している。

膝を折った戦士。その姿で見つかった「彼」。

その彼を呼ぶ声に導かれるままに立ち上がる。

実際に言葉を交わした訳では無い。

だが彼を見あげる彼女と彼は再び出会ったのだ。

燻っていた炎が燃えがり、薪が爆ぜるように動きだす。

背面の2基のバーニアと胸部のバーニア2基に火が入り、溜まっていた煙を吐き出すように勢いよく起動する。むせ返るような黒煙が格納庫に充満し、その視界全てを黒く塗りつぶしていった。

瞬間、その逃げ道を作るように格納庫の扉が開かれた。

外から侵入した光と、それから逃げるように抜けていく黒煙が道を形作る。

その中を、鋼鉄の人型が飛び去った。

火の粉を巻き上げながら、舞い上がる灰を纏いながら。

獲物を見つけた、猟犬のように。

その背に居る者の願いに、応えるように。

「貴方はまた、飛び立つのね。また一緒に戦いましょう。貴方が戦い続ける限り。私は貴方に寄り添いましょう。」

消え入りそうなその声は、格納庫の闇に溶け込んでいくようであった。

※※※※

砂に塗れた大地を、バーニアの炎で削りながら煤だらけの機体は高速で突き抜ける。頭部の目にあたる部分から真つ赤に燃える光の軌跡を後に残しながら。

進む先には、砂嵐が巨大なドームを形成していた。

目標はその中心。

ドームの外壁は砂を巻き上げる暴風、その壁は鉄ですら切り刻むような勢いだ。

それに比べればちっぽけなその機体は、すぐにでもバラバラにされるだろう。

だが、そうはならなかった。

辛うじて動かす事ができるであろう右腕。それを支える右肩はトースターを横に2個並べたような形。

その上部が展開し、中に残っていたモノが見える。

彼が戦っていた時代では、ラージミサイルと呼ばれていた。

それは着弾した瞬間に巨大な爆発と衝撃を与えるものだ。

それが今2発、発射される。

時間差で放たれたミサイルは暴風の風に触れた瞬間にその破壊力を遺憾なく発揮し、一瞬だがそこに壁に穴を空ける。

だがすぐにでもそれは巻き上がる風で塞がろうとしていた。それをさせるまいと爆発する2本目のミサイル。

爆炎が上がる中、そのちっぽけな機体はかまわずにその中へ飛び込んだ。

そうして、すでに黒焦げな機体を新たに燃やしながらその機体はついにドームへの侵入を果たす。

その中心では、竜種を操る黒いドレスをきた化け物と戦う者達がいる。

彼女達はまだ知らない、自分達と共に戦う事になる彼のことを。

彼女達には知ることはできない、彼が何であるのかを。

彼女達に知る術はない、彼が何故戦うのかを。

※※※※